

駕籠の行方

野村胡堂

一

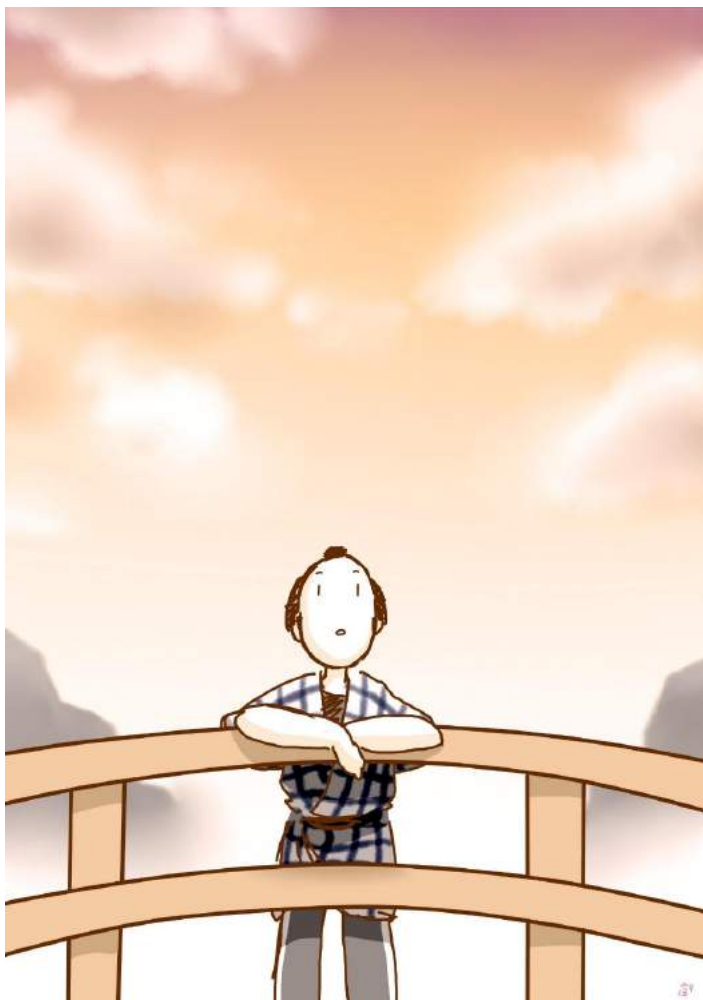
ガラツ八の八五郎はぼんやり日本橋の上に立っておりまして。

御用は大暇、懐中は空っぽ、十手を突っ張らかしてパイ一にあり付くほどの悪気はなく、このあいだ痛めたばかりの銭形の親分のところへ行つて、少し借りるほどの胆きんもも据わりません。

夕映ゆうばえの空にくつきりと浮いた富士を眺めながら、歌にも俳諧はいかいにも縁の遠い思案をしていると、往来の人はジロジロ顔を見て通り

ます。どう面喰つても、身投げと間違える気遣いはありませんが、その代り、夕景の忙しい往来の邪魔になることは請合うけあいです。

駕籠の行方



©2017 萩 柚月

「おや？」

ガラツ八はガン首をあげました。自分の足許に南鐐が一枚チャリンと小さい音を立てて躍おどったと思うと、眼の前をスレスレに、一艇の駕籠が通ります。

ガラツ八はそいつを拾って、無意識に駕籠を追いました。間違いもなく南鐐は、駕籠の中から落ちたものだったのです。

「ちよいと、若い衆——」

ガラツ八はそう言いかけた声を吞みました。

駕籠を追うともなく橋を渡って南へ、高札場の前へ来ると、又も駕籠から、チャリンと一枚。

「おッ」

拾つて見ると、こんどは小判が一枚。

この山吹色の小判が、駕籠を担いだ後棒の注意も惹かず、織るような往来の人の眼にも触れず、一三三間後から追っかけた、ガラツ八の手に拾われたのは、全く奇蹟に近い偶然でした。

いや、偶然ではなくて、それは後ろから跟けて来るガラツ八を目的に、わざと拾わせる心算つもりで落したのかもわかりません。

しかし小判一枚となると、八五郎ならずともそれは大金です。夕陽にキラリとするのを指につまんで高々と宙に振りながら、ガラツ八は思わず駕籠の後を追いました。当然それは深々と垂れを

おろした駕籠の中の客に返さるべきものだったのです。

「待ってくれ——その駕籠待ってくれ」

あわてて駆け出したガラツ八の足許へ、その軽率をとがめるように、カラリと落ちたのは、その頃の下町娘が好んで簪さした、つまみ細工ざいくの美しい櫛くしではありませんか。

「——」

ガラツ八は完全に封ふうじられてしまいました。駕籠の中からは、明かに、ガラツ八の注意を促うながすために手当り次第に物を捨てていくのでしよう。そうでもなければ、南鐙と小判と飾り櫛は、いかにも取合せが変てこです。

中橋から南伝馬町へ来ると、四文銭が一枚、コロコロと転がり落ちました。駕籠の中の客も、少し懐ろが怪しくなったのかと思うと、京橋を渡ったところで落したのは、二分金が一枚。

駕籠はそんなことに構わず、夕暮近い江戸の町をヒタヒタと急いで、芝口から宇田川町へ、浜松町へとさしかかります。

人足は次第に疎まばらになって、八五郎もあまり駕籠の側へは寄るわけに行きませんが、中から落す品は青銭になり、小粒になり、簪かんざしになり、五丁に一つ、三丁に一つの割合いで絶えず八五郎の注意を惹ひきつけるのでした。

金杉を渡って、芝、田町へ差掛かると、懐中鏡が一つ抛ほうり出さ

れたのを最後に、駕籠はピタリと停とまりました。が、駕籠の側に附いていた若い男が、何やら駕籠屋に耳打ちをすると、そのまま駕籠をあげて銀鼠色の夕靄ゆうもやに包まれた暮の街を、ヒタヒタと急ぎます。その頃から八五郎の追跡も一段と熱を加えて、もうすきつ腹も、疲れも忘れておりました。

たかなわ高輪北町へさしかかった頃は、すっかり暗くなりました。が、駕籠は灯も入れず、唯ひたむきに急ぐばかりです。往来が暗くなつたせいか、駕籠からはもう何んにも落ちません。

「あッ、野郎ッ、挨拶をしろ。いきなり人に突き当って」
それは全く不意でした。東禅寺門前とうぜんじあたりから飛び出した遊び

人風の男が一人、一生懸命に先を急ぐ八五郎にドカンと突き当ると、いきなり火のつくような剣突きを喰わせるのです。

「勘弁しねエ、あやま過ちはお互いだ」

八五郎は軽くあしらって一步踏み出しました。

「何をツ、過ちはお互いだツ？ 其方から突き当って、よくもそんなことを言やがる。これでも喰えツ」

パンパンパンと、ガラツ八の頬は鳴りました。小気味の良いほど手の早い男です。

「野郎、なぐ撲ったなツ」

モタモタと掴みかかる八五郎。

「撲ったがどうした、唐変木奴とうへんぼくめツ」

つづいてまた四つ五つ、パンパンパンと打ってくる腕を辛くも引っ搦んで、ガラツ八得意の力業になりました。

「畜生ツ、こうしてくれよう」

相手はしかし恐しい早業でした。八五郎の胸倉を搦んで往来に引っくり返ると、仰向きになりながら手と足を働かせて動きモーシヨンの遅い八五郎を滅茶滅茶に悩ませます。

「えッ、うるさい野郎だツ。——これが見えないか。御用だぞツ」
持て余し抜いた八五郎は、とうとう懐ろから十手を取り出して、この厄介な挑戦者に見せる他はなかつたのです。

「あッ、そいつはいけねエ」

相手はいっぺんに兜かぶとを脱ぎました。十手を見ると一も二もありません。八五郎の胸倉を離すと一足飛びに、どこともなく姿を隠してしまつたのです。

「何んという野郎だ。忌々いまいましい」

八五郎は大舌打ちを二つ三つ、埃ほこりを払つて駕籠を追いました。その時はもう肝腎の駕籠はどこへ行つたかわかりませんが、

あきらめ兼ねた八五郎は、それでも追手をゆるめず、品川へ入つて、歩行新宿かちから南本宿まで飛びましたが、見覚えの駕籠は影も形もなく、犇々ひしひしと身に迫るのは、噛み附くような空腹感です。

二

「親分、これ何んと判じたものでしょう？」

ガラツ八の八五郎は錢形平次の前へ、前夜日本橋から芝、田町までの間に拾った南鐐なんりょう、小判かざりぐし、飾櫛かざりぐし、四文錢、二分金かんざし、簪かんざし、懷中鏡——と畳の上へ並べて行つたのです。

「何んだえ、それは？」

平次もツイ起き上がりました。縁側に腹ん這いになって、蟻ありの作業を眺めながら、煙草をすっているところへ、いきなりガラツ

八がこの判じ物を持込んで来たのでした。

「あつしには分りませんよ、親分」

「どこで拾って来たんだ。——まさか淡島様のお堂を搔き廻したんじゃあるまいな」

「そんなタチの悪いことはしませんよ。こいつは日本橋から高輪の方へ行った駕籠の客が落したんで」

「フーム、面白そうだな。詳しく話して見な」

平次も乗気になりました。四文銭と小判に挟まれてつまみ細工の櫛くしや、平打の銀簪ぎんかんざしや、その頃の世界では、この上もない贅沢だったギヤマンの懐中鏡が、妙に感傷をそそります。

「こういうわけですよ、親分」

ガラツ八は昨夜の経験をこまごまと語りました。喰い附くような熱心さでそれを聴き入る平次。

「それからどうした」

「仕方がないから、品川からトボトボと歩いて帰りましたよ。親分の前めえだが、江戸は広いね」

「何をつまらねエ」

「だって、家へたどり着いたのは、亥よっ刻（十時）近い刻限でしょう。気が附いて見ると昼から何んにも喰わなかったんで、いや腹が減ったの減らないの——」

ガラツ八は頬を凹まして見せるのでした。

「相変わらず一文無しか」

「お察しの通りで、——帰ったら親分に借りて返すとして、拾つ

なんりよう

た南鐐で、夜鳴き蕎麦そばの暴れ喰いでもしようかと思つたが、——

怖い顔なんかしちやいけません。そいつは思い止とどまりましたよ。——

たいがい

——南鐐の面は大概同じだし、二朱しゆに通用することには変りはないが、

拾つた金で腹を拵えちや、懐中の十手に済まねエ」

あき

「呆れた野郎だ。一文無しで江戸の街を歩く御用聞があるものか。

——何時、どこへ飛ばなきやならないか分らないじゃないか」

「相済みません」

ガラツ八はピヨコリとお辞儀をしました。

「しかし、そいつは飛んだ面白い話になりそうだ。——駕籠が停つたのは芝、田町に間違いあるまいな」

「田町四丁目、辻番の手前で、——あすこの大福は大きくてうまい」

「馬鹿だなア。——それから変な野郎が喧嘩を吹っかけたのは東とう禅寺前」

「高輪中町で、——あの辺には洒落た掛しやれけ茶屋がある」

「そこで長いあいだ揉み合つたのか」

「なアに、ほんの煙草一服の間でさ。——ポンポンポンといきな

り四つ五つ引っ叩いて、引っ組んで転がって——」

ガラツ八は仕方話になりました。

「起き上がって見ると駕籠がいなかったんだね。それとも暗くて見えなかったのか」

「あの辺は海沿うみぞいの一本道でさ。日が暮れたって、一丁や半丁の見透しがききますよ」

「横道へ入ったのかな」

「そんなことかも知れません。——とにかく、向うから来る駕籠はあったが、此方から行くのは一つもなかったんで——」

「ちよいと待ってくれ。その向うから来る駕籠というのは、東禅

寺前で逢ったのか」

「さんざん揉み合つた野郎が逃げたんで、立ち上がつて改めて駕籠を追っかけると、ちようど品川の方から逆に町駕籠が一挺飛んで来ましたよ」

「馬鹿野郎ッ」

「へエ——」

不意の馬鹿野郎を喰つて、ガラツ八はキョトンとしました。叱られる意味が分らなかつたのです。

「その駕籠だよ」

「へエ——？」

「お前に跟つけられてると知って、仲間仲間に喧嘩喧嘩を吹っかけさせ、面喰面喰って組打ち組打ちをしているうちに、通り過ぎた駕籠駕籠がクルリと向き直直って引引り返返して来たのさ」

「へエ——」

「駕籠駕籠は多分多分芝、田町田町辺辺まで行く筈筈だった。——その証拠証拠には高輪高輪まで行行った時時分分は、足許足許が怪怪しいほど暗暗くなっているのに、提ちよう灯ちんも点点けなかつたといいうんだららう」

「その通り通りですよ」

「お前お前を撒まくつもりで、一度一度停停めた駕籠駕籠をグングン先先へ伸のさせたんだ。——駕籠駕籠の中中から小判小判や小粒小粒や簪かんざしまで落落されて知知らずにい

る筈もないし。あとを跟けるお前の顔は目立ち過ぎるから、誰だつて岡っ引に狙われていると気が附くよ」

「へエ、そんなものですかね」

ガラツ八は長んがい顎をブルンと撫でるのでした。神田から日本橋へかけて、この顔を知らないものは江戸っ子のもぐり見たいなものです。

「最初に駕籠を停めた芝、田町の辻番のあたりが臭い。その辺へ着ける心算つもりだつたんだらう。——そこで女の一番大事な懐中鏡を落して、その先は何んにも落さなかつたのは変じゃないか」

「そう言えばそうですね」

錢形平次の推理の的確らしさに圧倒されて、ガラツ八はただもう唸うなるばかりでした。

「何にか容易ならぬ臭いがする。——仕事になるかならないか分らないが、駕籠から懐中鏡まで捨てるのはいじらしいじゃないか」
「どうしたら相手を突きとめられるでしょう。親分」

「外に術てはない、駕籠を捜し出すんだ。駕籠か若い衆に何にか変ったことがなかったか」

「そう言えば一つありましたよ。——駕籠は四つ手に違いないが、筋の通った立派な品で、垂たれをおろして中はわからないが、後棒を担いだ若い者は、右の耳みみたぶ朵がなかったようで——」

「それだけ分りゃあとひと押しだ。日本橋か芝か、ともかく、飛脚屋と町役人に聴いて、みみたぶ 耳朶のない駕籠屋を捜し出し、どこからどこへ、どんな人間を送ったか訊いて来るがいい」

「そんなことならわけはありません」

八五郎には初めて事件を手繰たぐる緒口いとぐちが分りました。

「耳朶のない駕籠屋を捜すのはわけはあるまいが、心附けがうんと出ているだろうから、口を割るのは容易じゃあるまいよ。甘く見て失策しくじるな」

「大丈夫ですよ、親分」

八五郎は懐中の十手をトンと叩いて、一散に事件の真ん中に飛

び込みます。

三

それから三日目。

「あ、驚いたの驚かねエの」

ガラッ八の八五郎は、髷節を先に立てて、転がるように飛び込んで来ました。

「何を驚くんだ。三日に一度くらいずつその調子で飛び込まれると、俺の方が参るぜ。お前と附合っていると、つくづく寿命の毒

だと思つよ」

うつらうつらと三尺の庭にも陽炎の舞う昼下りでした。仮名草紙を出して、九郎判官義経かなんかにあこがれていると、いきなりこの闖入者です。

「全く寿命の毒ですぜ。だから武家は附合いきれねエ。——大丈夫あつしの首は繫つながっているでしょうね。見て下さいよ、親分」
八五郎はピタピタと自分の首を叩きながら続けるのでした。

「——無礼者ツ、手討にする、そこへ直れツと来た。——面白い、見事に斬っておくんなさい。斬られて赤い血が出なかつたら、代は要らねエ。——かなんかで、沓脱くつぬぎの上へ尻を捲ると、いきなり

ピカリと来た。いや驚いたの驚かねエの、生垣を突き破って逃げ出すと、芝から神田まで、街角を曲るたびに、月代さかやきと顎あごを押えて、一目散に飛んで来ましたよ。うっかりガン首が胴体から離れて、ポロリと落ちた日にゃ、焼継ぎはきかねエ」

「馬鹿野郎ッ、何んというあわてようだ。拔身ぬきみで脅かされて逃げ出して、懐ろの十手の手前済むと思うか」

「それがね、親分。相手が悪いんで。何しろ、千二百石の御旗本、

佐野求馬様もとめ——」

「それがどうしたんだ。筋を通して見るがいい」

「こうなんで、親分」

——ガラツ八の話は長いものでした。が、かいつまんで言うのと、芝、田町四丁目の旗本佐野将監というのが先年亡くなつて、跡取りの求馬というのは二十八歳になるが、芝一円知らぬ者もない馬鹿殿様。將軍家への御目見得も病氣と称して延々になつたまま、重役方に手蔓てづるをたぐつて、どうやらこうやら家督は仰せ付けられました。が、あまりの低能振りに、武家方からは嫁のくれ手もありません。

五尺八寸のノツポで、顔は白うすのようになつて、二十八歳で青あお洩ばなを二本垂らそうという抜群さ。それが何の因果いんがか、行儀見習に上がっているお腰元、お袖という娘に執心してどうしても嫁に欲

しいと言ひ出したのです。

お袖は驚いて自分の家へ逃げ帰りました。これは日本橋通三丁目の上総屋という糸屋の一人娘で唄の文句にあるような綺麗さ。佐野求馬は白痴はくちの一心で、死ぬの生きるのという騒ぎを起したのも無理のないことでした。

佐野家からは、あらゆる条件を提示し、人橋を架かけての掛合いが始まりました。上総屋の亭主吉兵衛は、娘のために必死になつて断りつづけましたが、佐野家は一人息子いとしさに、求馬の母親お育が、用人木原伝之助を督励して、あらゆる手段をつくしての談判です。

さいしよは約束の年季が明けないのに、夜逃げ同様屋敷を脱け出したのが怪しからぬという言い掛りでしたが、近頃はお袖に預けた古筆こひつの茶掛け一軸じくと、彫三島ほりみしまの松の葉の香盒かうじゆうが紛失したから、それを返すかお袖を引渡すかという強談になりました。

あまり無法な掛合いに、上総屋吉兵衛自身で佐野家へ出向きましたが、これはそれつきり帰らず、五日経っても七日経っても消息のないところを見ると、用人木原伝之助に殺されたのかも知れません。

その上今から三日前の夕刻、父親のことを心配して本銀町もとしろがねの叔父のところまで相談に行った娘のお袖は、帰り途不思議な駕籠に

乗せられて、どこともなくつれて行かれたという騒ぎです。

「あつしが跟つけたのは、その娘——お袖を乗せた駕籠だったに違

いありません。みみたぶ 耳朶みみたぶのない駕籠屋の又六という男を芝で捜し出し、

十手を見せて訊くと、あの日うんと駄賃をもらって、日本橋から娘を乗せ、芝田町四丁目まで行く約束で飛ばすと、後を跟ける者があるので、高輪まで伸ばして田町四丁目まで引つ返したに違いないと白状しました。駕籠を着けたのは佐野家の裏口、娘は騙だまされて駕籠へ乗ったと知ると、初めのうちは少し騒いでいたが、佐野家へ着くと観念したものか、しおしお 萎々しおしおと歩いて裏口から入ったそうですよ。——父親に逢わせるとか何んとか言ったんでしよう。又

六もそんなことを言っていました」

ガラツ八は一気に弁じました。

「それで驚いて飛んで来たのか」

と平次。

「そんなことに驚きやしません。弁天様の申し子のような娘を、二十八の二本棒にやつちゃ、あんまりもつたいないから、あつしが上総屋の内儀かずさに会って、いろいろ相談をした上——娘のお袖には許嫁の約束があり、近いうちに祝言させることになっているから、嫁に上げるわけには参りませんと掛合った」

「フーム」

「その掛合いに行つたのは、あつしと上総屋の番頭の庄七という親爺で、この男は勘定のことしか分らないから、まアあつし一人で談判をしたようなものですよ」

「それでどうした」

「芝、田町の佐野の屋敷へ行つて、上総屋の娘を返して貰いたいと言つたが、用人の木原伝之助というのが大變な野郎で、——お袖は実家に逃げ帰つたきりここへは一度も来ない。夢でも見たか、出直せという挨拶だ」

「フーム」

「あんまり癩しやくにさわるから、あつしは小判と四文錢と、櫛くしと簪かんざしと

懐ろ鏡を縁側に並べ、お袖を乗せた駕籠はこの屋敷へ入ったに違いないと言ひ張った。——尤も証拠はみんな親分の智恵の受売りだがそれでも味噌みそ挿用すり人をギューツと参らせたことは確かだ」

「フーム」

平次も大分おもしろくなつた様子です。

「すると、それならそれでいいとして、お袖の聾はどこの何んという者だ。拵えごとはならぬぞ。——それを聴こうと詰寄られた」

「面白いな」

「少しも面白くはありません。番頭の庄七は因業いんじょうなことに商売のことしか掛引を知らねエ。——さア、何んとか、返答せいッ——

と脇差をひねくられると、青くなつて一句も出ない。仕方がないから、あつしが引受けて一世一代の大嘘おおうそを吐いたね、親分」

「嘘は晦日みそかが来るたびに吐いてるじゃないか。一世一代もないものだ」

「茶にしちやいけませんよ。ね、親分——何んと言つたと思ひます。あつしはいきなり襟を直して、こう正面をきつたね。——憚はばか

りながら、上総屋お袖の髻こむぎというのは、この八五郎でござんす——と」

「馬鹿野郎ッ」

「それね、親分だつて驚くくらいなもの、向うはもつと驚いた。

暫らくあつしの顔をまじまじと見ていたが、通三丁目の小町娘の
聳らしくないと気が附いたか、無礼者ツ、嘘を申すと手討にする
ぞと来た。こうなると意地だ、あつしはいきなり尻を捲つて――」

「分つたよ。くつぬぎ沓脱くつぬぎに坐つたまでにはいいが、ピカリと来ると、いけがき生垣いけがき
を突き破つて逃げ出したんだらう。仕様のない野郎だ」

「だって、相手は一千二百石の旗本じゃ、十手を出したって驚
きやしません。こうなりや逃げるが勝ちで」

八五郎の話は際限もなく飛躍します。

四

錢形平次は、それから三日ばかり、あらゆる方面に手を廻して調べ抜きました。

上総屋の内儀お篠は、夫の行方不明に次いで、たった一人娘のお袖の誘拐ゆうかいで、半病人のようになっており、何を訊いても埒らちがありませんが、そのうちから、上総屋吉兵衛はよほどの決心で佐野の屋敷に行ったらしく、手筐てばこの中には万一の場合のために、遺書が用意されてあったということが分りました。

その遺書はかなり突っ込んだもので、自分が帰らなかつたら、佐野の屋敷で殺されたものと思えとも書いてあり、一人娘のため

に命を捨てる気になった、父親の突き詰めた愛情が滲み出します。にじ

町方からの添え状で龍の口へ行った平次は、そこで佐野家の家督相続に、いろいろ手続きの上に不備ふびがあり、洗い立てるとずいぶん問題になりそうなのを確かめると、いよいよ佐野家を相手に、一と芝居を打って見る気になりました。

「八」

「へエー」

平次の改まった顔を見ると、ガラツ八も膝つ小僧を揃えないわけには行きません。

「お袖を助けるのは、少しばかり骨が折れるが、やって見るか」

「やりますよ、親分。どんなに骨が折れたって、あんなピカピカする娘を捨てられるものですか。嘘でも一度はあつしの許嫁になった娘だ」

「相手が悪いから、一つ間違えると、命がけの仕事になるかも知れないよ」

「命がけ——へッ、親分の前だが、あつしは何時命に糸目をつけました。はばか 憚りながら——」

「まあいい、今度はピカリと来ても、逃げ出さないようにしてくれ」

「あれは、不意だから驚いたんで、覚悟さえ決めてかかれば、味み

増播用人そすりなんかおどに脅かされるものですか」

「その気でやってくれ。うっかりするとお袖の命も危ない。唄にまで歌われた通三丁目の糸屋の娘だ。二十八の馬鹿殿様と一緒にされるくらいなら、死ぬ気になるかも知れない」

「なるほどね」

「今までも、あの佐野という屋敷で、腰元が二三人死んでいる。馬鹿殿様の玩具おもちゃにさせるにしては、人間の命はもつたいない」

「行きましよう、親分」

八五郎の血は沸々と高鳴ります。

話はこれで纏まとまりました。

その晩、錢形平次は駕籠を吊らせて、芝、田町四丁目の佐野家の裏門に乗込んだのです。

「頼む」

「誰じゃ」

「町方の御用を承る、うけたまわ神田の平次と申すものでございます。御用人木原様が御入用の品を持って参りました。御取次を願います」

「しばらく待つように」

門番が顔を引っ込めました。それからざつと四半刻（三十分）ばかり、いいかげんしびれのきれた頃くぐ潜り門もんをギーと開けて、

「庭先へ通らっしゃい」

門番は恐ろしく権柄づくに案内します。千二百石取りの屋敷と
いうにしましては場所柄決して広くはありませんが、庭にはもう桜が
咲いて、夢見るような朧月が照らしている風情でした。

五

「町方の者に用事はない筈だが、いったい何を持って来たと申す
のだ」

縁側に出たのは用人木原伝之助、四十五、六の存分に強したたかな感
じの男が、庭から廻された平次と八五郎を見下ろしました。

「御用人様は、この男を手討にすると仰しやつたそうで、改めて私がつれて参りました。どうぞ御存分になすって下さい」

「何んと言う」

「八、覚悟はいいな」

「へエ、この通りで——」

バラリと肌を脱ぐと、いつの間に用意したか、一尺五寸ばかりおおのしの大熨斗を、肌守りの紐くくに括くくって背中に斜めに背負っている悪戯おどろつ気の八五郎です。

「こんなあわてた野郎でございます。八五郎と言ってあつしの子分で。へエ、これでもお上の十手捕縄を預っておりますから、御

成敗になれば届け出なきやなりません。ちよいと一筆、こうこう
言うわけで斬つたと、お認めしたたを願います。尤も龍の口の目付衆ま
で御当家から御届け下されば、町奉行所の方はあつしが口で申し
てもことが済みます。何んと申しても、吹けば飛ぶような野郎で
ございますから」

平次は吃きつと見上げました。

「平次とやら、お前は、当屋敷をゆすり、に來たのか」
木原伝之助はしずかに押えました。

「飛んでもない。——あつしはこの野郎を差し上げて、改めて
上総屋かずさの娘お袖を頂戴して参ります。上総屋の内儀から、書面を

貰つて参りました」

「ならぬと申したら」

と木原伝之助。

「そんなことを仰しやる筈はございません。——上総屋の娘は上総屋の娘で、御武家方へ行儀見習奉公に上がったもので年季も前借もあるわけはございません。古筆こひつの軸物じくものとか、三島の香盒かうごうとかは、いずれ屑屋くずやか何んかで捜してお返しいたします。へエ——」

「だ、黙れツ、無礼者ツ」

木原伝之助は一喝かつしました。

「おどかしちゃいけません。上総屋の躰たゝみになつて首を斬られたり、

公儀御書上げも何んにもない、——本當にあつたやらなかつたやら分らない品物がなくなつたなどと因縁いんねんをつけられて、娘を誘拐かどわかされちゃ町人が敵かないません」

「えッ、黙らないか。ここを何んと心得る」

「地獄の一丁目でしょうな」

「汝おのれッ」

抜いた一刀、ピカリと来ても平次は驚く様子もありません。

「もう一つ、上総屋吉兵衛の死骸を頂いて参りましょうか」

「な、何んと言う」

「娘を無事に戻したさに参つた吉兵衛、それを縛り首にした不仁

だけでもお前さん腹を二、三十切つても追つ付くまいぜ。吉兵衛は家を出るとき立派な書置を書いている。そればかりではない。この屋敷のお長屋で殺されかけた吉兵衛が、消炭けしずみで書いた手紙を外へ抛つたとは気が附くまい。吉兵衛が殺されても、精いっぱいの仕事をして行つたお蔭、——はばか憚りながら、あつしの上役の笹野様という物のわかつたお方が、吉兵衛の書いた二本の遺書を持つて、大目付の御役宅に行つておられる。今晚中に娘のお袖と、この平次が無事で帰らなきゃ、明日は龍の口で佐野家取潰しの願いが取上げられるんだぜ。おい御用人、どうしてくれるんだ。消炭の書置きは、吉兵衛が殺される晩、表門お長屋の左三つ目の窓か

ら抛ほうつたのさ。どうだ驚いたろう」

「――」

「嫁が欲しきや、尋常に手順を履ふむがいい。千二百石の殿様が、町娘を手籠めにして済むと思うか。今までにもその術てで三人も腰元が死んでいるじゃないか」

「――」

「その上、御当主は病氣と言って、將軍家御目見得も延ばしてあるそうだが、將軍様が一と目、佐野の殿様を御覧になったら、どんなことになると思う。――風癪ふうてんはくち白痴は家督になるかならないか。

――どんな手蔓てづるをたぐって家督を継いでも、こいつが知れると

いっぺんに御取潰しだ。——吉兵衛の遺書といっしょに、その仔細さいを大目付衆まで、夜の明けないうちに届け出る手筈ができているんだぜ。どうだ御用人。いやさ、木原さん」

平次はヒタヒタと嵩かさにかかりました。火のような熱弁です。

「恐れ入った、平次殿」

木原伝之助は虚勢を失って、畳の上に崩折くずおれると、次の瞬間しゅんかん、一刀を引抜いて、ガバと腹に突っ立てたのです。

「あ、待った」

驚く、平次、ガラッ八。

「いや、一々尤も。——みんなこの木原伝之助の至らぬからだ。

お袖は歸して進ぜる。がその代り——この経緯いきさつは皆んな内聞に願
いたい。佐野家のために」

木原伝之助は紅に染んだ手を挙げて片手拝みに拝むのです。一
番無情で、この上もない強したたかな顔をした木原伝之助は、この上も
ない忠義者と知って、平次もしばらくは二の句が継げません。

「三百年も伝わる家柄、御祖先の武名を護るためには、よい世継
ぎを得る他はない。——武家方からよい嫁を迎える道のなくなつ
た上は、町家から優すぐれた娘を入れるのが、——この木原伝之助の
忠義、——佐野家を興おこす唯一の道であった。——吉兵衛を手に掛
けたのは、ほんの行き掛りからだだが、もとはやはりこの木原伝之

助が至らぬからだ」

「――」

「若殿御身の上ばかり案じて亡くなられた先殿様や、この上はただよい嫁女ほしさに、老の身おいを忘れて苦勞遊ばす後室様の御安心のために、この木原伝之助は三人まで美しい腰元を犠牲いけにえにし、その上、上総屋吉兵衛を手にかけて不仁この上もない仕打ちが、酬むくいがなくて済もうか。――死ぬ身は少しも惜しまぬが、そのため佐野家に万一のことがあつては、御先祖様にも相済まない。平次殿」

手負いは苦しい息の下から衷情を訴えて、ひたむきに平次を拝

むのです。そればかりではありません。縁側の障子の隙間からは、泣き濡れた白髪頭の老女が頼み少ない姿で拝んでいるのが、平次の眼にまざまざと映るのです。

×

×

お袖を駕籠に乗せて帰る平次。この時ほどしお萎れているのを、ガラッ八はまだ見たことありません。そつとたもと袂を引いて、

「親分」

慰め顔に差しのぞく八五郎に、

「俺は飛んでもないことをしてしまつたよ。あんな忠義な用人を、殺さずに済みます工夫もあつたらうに——」

平次は駕籠の方を憚りながら言うのでした。
はばか

「でも仕方がないじゃありませんか」

「向うでも仕方がなかったのさ。由緒ゆいしよのある主人の家を立てて行くために。——母親にしては自分のたった一人の倅に人間らしい生活をさせて、夫の家を絶やさないために——」

「でも、そいつは間違いでしょう。そのために人まで殺しちや、——ところで親分。吉兵衛の消炭けしづみで書いた遺書が、本当にお長屋の格子こうしの外に落ちてたんですか」

「嘘だよ。——吉兵衛はあの屋敷の中で殺されたに決っているが、

——おもや母屋で殺す筈はないから、多分用人の長屋につれ込まれたに

違いあるまいと見込みを立てたのさ。——殺される前に少しくらいの隙があれば、消炭の遺書くらいは格子から抛るだろうじゃないか、——そこまで見当をつけて言うのと、木原伝之助はギョツとしたらしいよ」

「へエ——」

ガラッ八も呆あきれました。

日頃の平次トリツクにない詭計です。

「だが八。お前はまさか、本当にお袖の聳になる気じゃあるまいね。あれは少し綺麗過ぎるから用心するがいいぜ」

そう言って五六間先へ行く駕籠を、顎あごで指した平次は初めて固

い頬ほおをほころばせるのでした。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

駕籠の行方

初出―「オール讀物」昭和十七年三月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第七卷
河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>